第５０号　2014年３月３１日

カトリック仙台司教区・ カリタスジャパン
東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

東日本大震災で、カトリック教会は大きな転換点を迎え、変貌しつつあります。それは、日本には 16 の教区があるとしても、一つの神の民の姿を示しているからです。今回は、宮古ベースの振り返りと、心のこもった祈りに満ちた宮古・大槌・釜石・米川各ベースの 3.11 の報告、そして、大船渡教会で行われたインターナショナルミサとチャリティーコンサートの模様をお届けいたします。

2013 年をふりかえって・2014 年に向けて
【宮古ベース】

2014 年
今年も仮設住宅訪問を続けていきます

札幌カリタス宮古ベース世話人　和田　真一

大震災から３年が過ぎ、札幌カリタスとしての活動も４年目に入ります。これまでもお伝えしておりますように、宮古での活動内容は、仮設住宅にある談話室や集会室にお邪魔し、飲み物やお菓子、全国の教会からボランティアベースへ届けられる品々、時には昼食を提供しながら皆さんの話に耳を傾ける、名付けて「移動カフェ」の開催です。この機会に住民が顔を合わせて話をしたり、ボランティアとの話を楽しまれたり、カラオケやゲームに興じたり、楽しいひと時を過ごしていただいています。宮古教会が主催して 10 回ほど行われてきた「分かち合いマーケット」も昨年秋で終了すると聞いています。

他に音楽会や、各地のバザーや炊き出しなどのイベントでジンギスカン焼肉などの提供も数回行いました。2，３か月おきに来てくださる世話人やリピーター中心に、宮古教会信徒の方々や盛岡の教会から来てくださる信徒の方々と手を携えて活動してきました。週に５人程度と規模は小さい団体ですが、継続するうちに皆さん親しみを込めて、カリタスさんと呼んでくださいます。

震災のあと、多くのボランティアグループが来ていましたが、今はほとんどが活動を縮小あるいは終了しており、常時活動しているのはカリタスだけとなっています。昨春、宿舎としてお借りしていた空き仮設住宅を返さなければならなくなった際には、ある住民が市役所へ行かれて「カリタスさんが引き上げてしまわないように住宅を継続使用させて」と直談判され、またある方からは「3 年経つからカリタスさんも引き上げるのでしょう？」「カリタスさん帰らないで」と言われることもありました。そのような声に押され、市内に一軒家を求め、宿舎としたのでした。ボランティアの参加者数は減少しており、一部の方たちに繰り返し宮古へ行っていただくという負担に頼っているのが実情でもあります。

これらを後方支援部で検討し、被災住民のカリタスへの期待が今なお大きく、その方たちに寄り添うことは私たちの果たすべき務めであると判断し、2014 年度も活動の継続を決めました。細々とであっても時には中断があるにせよ、〝未だ被災地を忘れない〟ことを示していきます。2014 年度は、これまでの仮設住宅訪問活動を中心に続けますが、この４月で仮設住宅に市から派遣されていた「支援員」制度は廃止されますので、いっそうカリタスへの期待が増えてきています。また復興住宅への転居に伴う相談や支援の働きも期待されています。

各ベースの 3 月 11 日

《3・11　平賀司教様が宮古教会に来てくださった》

札幌カリタス宮古ベース世話人　今野　忍

東日本大震災が起こった３月 11 日、宮古市では市のシーアリーナ（市民総合体育館：震災時に最大の避難所になった所）にて、午後１時半より、「宮古市東日本大震災３周年追悼式」が行われ、１,500 人ほどの方が祈りをささげておられました。

宮古教会では午後２時より、被災者追悼と復興祈願ミサが捧げられました。仙台教区の平賀徹夫司教様と盛岡の教会から司祭３名、大分から派遣されている川口敏神父様の共同司式でおこなわれ、仙台教区神学生、ボランティアに来ていた札幌教区の神学生も侍者をされました。宮古教会の信者の皆さんの準備のもと、盛岡からバスをチャーターしてこられた信者さんとともに、聖堂いっぱいでのごミサとなりました。

カリタス宮古ベースの活動はこの日は休みとし、藤女子大学(カトリック)の学生４人を含めて６人のボランティアたちも参加して祈りました。

午後２時 46 分にはミサを中断して鐘楼の鐘がならされ市民とともに黙祷がささげられました。ミサ終了後、宮古教会から出席者におみやげとしてお茶と宮古名物のイカせんべいが贈られました。司教様も宮古教会の信者さんとしばらく歓談し、ご自分で運転して仙台への帰途につかれました。

《長崎教会管区と大槌町民との深い結びつき》

カリタス大槌ベース　スタッフ一同

2014 年３月 11 日、この日は大槌町東日本大震災津波追悼式が大槌町役場多目的会議室で行われ、大槌ベースとしても午前９時からの一般献花式に参加させてもらいました。

その後、午前１０時３０分からカリタス大槌ベースで、「東日本大震災三周年犠牲者追悼と被災地復興祈念ミサ」が、長崎教区の髙見三明大司教様主司式のもとに、郡山健次郎司教様（鹿児島）、宮原良治司教様（福岡）の３名の司教様と古木眞理一神父様（長崎）によって行われました。

夕方からは、別のボランティア団体の追悼行事のお手伝いを行いました。夜空にメッセージ付きの風船を数百個と飛ばすイベントで、たくさんの祈りが、冷え込みの厳しい月夜の空に小鳥の大群のように舞いました。その見事な光景に、大歓声が上がりました。

この日の活動に参加されたボランティアさんからは、「この日にお亡くなりになられた方々のことがあらためて身につまされて強く心にしみました。」という声や、「長崎教会管区が大槌町民と深く結ばれていることがわかりました。これからもできるだけ長期に支援していきたいと思います。人間は他者との結びつきがなければ生きてはいけないと思います。これからの人生の教訓といたします。」との感想をいただきました。

【ボランティア募集中】

各カリタスベースでは、ボランティアを募集しております。
春休みが終わる４月初め以降、ボランティア数が激減しています。
ボランティア活動へぜひご参加いただけますようお願いいたします。
お申し込み方法などは、『カリタスジャパンブログ』や各ベースのホームページ及びブログをご覧ください。
皆さまのお申し込みをお待ちしております。

《心はつながっている》

NPO 法人カリタス釜石　小笠原 綾子

2014 年３月 11 日のカリタス釜石は、ボランティアさんたちが全国から集まって来られ、大変にぎやかでした。この日を釜石で過ごそうと集まった皆さんは、総勢 32 名。１年ぶり、２年ぶりの懐かしい再会もあれば、この朝釜石に到着し初めてのボランティアをするという学生さんの姿もありました。

カトリック釜石教会では、午後２時半から命日の集い、続いて３時から追悼ミサが行われました。京都教区の大塚喜直司教様、大船渡教会のアントニウス・ハルノコー神父様、イエズス会の英隆一朗神父様による共同司式のミサでした。地元の信者の皆さんとボランティアが共にお祈りを捧げました。

３月 11 日の特別な活動としては、３回目となった駅前広場でのキャンドルナイトへの協力を行いました。会場セッティング全般（テント設置からキャンドル並べや片付け作業まで）を担い、カリタスチームのマンパワーとチームワークが発揮されました。キャンドルの灯った広場を、訪れた方々が手を合わせたり、写真を撮ったりしておられました。

定例の活動も実施しました。ベースの喫茶フリースペース「ふぃりあ」と２か所（天神町仮設と中妻町仮設）のお茶っこサロン活動です。談話や手仕事、将棋、卓球などのいつもの時間と命日の特別な時間を来場者の方々と共に過ごしました。

どこにいても心はつながっていると自然に思える一日でした。追悼と復興への想い。そこから多くの出会いが生まれ育まれたことへの感謝があふれ、明日への希望の光のように感じられました。

天神町仮設のお茶っこサロンの活動ノートに、初参加の学生ボランティアさんがこのように記しています。

「午後２時 46 分に全員で海の方を向きながら黙祷をしました。皆さん新たな思いを胸にして励まし合っていました。」

復興支援カレンダー完売御礼！

東日本大震災復興支援カレンダーは、おかげさまで大変好評をいただき、３月１６日をもって完売となりました。完売後、ご連絡をいただきました皆さまへは大変申し訳ございませんでした。
※サポートセンターでは、2011 年秋から T シャツを作成しておりますので、よろしければそちらもご検討下さい。

《大切に過ごした３．１１～被災地巡りと祈り～》

カリタス米川ベース　高濱 和浩

震災から４年目を迎えるこの日、被災地がどのように変化しているのか、気仙沼と石巻の２つのコースに分かれ、みんなで視察に伺いました。私たちのグループは、石巻を巡るコースでした。いろんなお店が出店し、賑わいが戻った石巻大街道、広大な空き地となった石巻市南浜地区(門脇小学校や石巻市民病院があった地区)、 コンクリートの建物が倒れている女川、 その他仮設商店街や、多くの児童が亡くなった大川小学校をみんなで巡りました。

多くの人が住む地域とあまり住んでいない地域の復興の格差や、震災から３年を経てもなお、解消されない仮設住宅などを目の当たりにしました。広大な空き地となってしまった景色は、今や草や残雪で、震災の跡が見えにくくなり、津波がなかったのではないかと錯覚してしまいます。しかし、よく見ると、土の中に生活の跡が見え隠れしており、現状をことさら、感じる機会となりました。

震災の犠牲者を数字で書くと 15,884 人。数字で書けば簡単ですが、全ての犠牲者の名前を紙に書き、読み上げるとなると、とても大変な時間がかかってしまいます。

亡くなった 15,884 人の方々には、それぞれ家族があり、友人がいらっしゃったことだろうと想像します。「もし私たち自身が残された一人だとしたら、今頃どうしているのだろう」そんな風に話してくれたボランティアもいました。

その後、南三陸町歌津地区にある長須賀海岸で気仙沼コースの人たちと合流し、地震のあった 14 時 46 分にみんなで黙祷をささげました。また夕方、米川ベースに戻った後、19 時から教会で追悼のミサに参加し、3 月 11 日のこの日を大切に過ごして終わりました。

※カリタス大船渡ベースの様子につきましては、「大船渡だより第４号」に掲載されておりますので、そちらをご覧ください。

※カリタス石巻ベースにつきましては、「２０１３年振り返りと２０１４年に向けて」の記事とともに次号でご紹介させていただきます。

チャリティーコンサート 大成功

仙台教区滞日外国人支援センター　林　愛子

2014 年 3 月 23 日、大船渡教会の聖堂に、入りきれないほどの人たちが集まり、アントニウス・ハルノコー神父様、ギャリー・ゲストヴェオ神父様、エドガー・ガクタン神父様という３人の淳心会の神父様とともにインターナショナルミサが行われました。

これまで教会がどこにあるかわからず、来られなかったフィリピンのお母さんたちが、震災を契機に教会がわかり、教会に来るようになりました。その子どもたちも、ハルノコー神父によって洗礼を授かり、教会の一員となりました。その人々が、いろいろな思いを胸いっぱいにし、ミサ中、タガログ語で、英語で、日本語で聖歌を歌いました。

ミサ後、11 時から大船渡教会併設の海の星幼稚園ホールにおいて、仙台教区滞日外国人支援センターと「パガサ」（「パガサ」はタガログ語で「希望」という意味です。）主催によるチャリティーコンサートが行われました。これは、3.11 の追悼とフィリピンでの大災害の支援のために開かれたものです。

コンサートは、上智大学の寺田勇文教授の司会で始められました。寺田先生は、フィリピンについて詳しく、今回の台風被害に際しても、救援活動を積極的に進めている方です。

台風 30 号の被害の中心都市であるタクロバンの小学校で働いていた Sr.ナリによる台風の被害の現状報告とパガサや教会が贈った支援金の用途の報告、それに対する「ありがとう」という感謝の気持ちがよく表れていました。

コンサートでは、水沢教会のクワイヤー、東京からギターのいわぶちさん、松原教会の末森さん、フォークシンガーの中川五郎さんとよしだよしこさんにご協力いただき、ハルノコー神父様が歌う CD「幸福（しあわせ）の星」に収録されている「いのち」（Sr.古木作詞作曲）や「MAY BUKAS PA（明日がある）」が歌われ、最後にはパガサのお母さんと子どもたちも一緒に「幸福の星」を合唱しました。

フィリピンの被災地の人々を思う日本の被災地からの“忘れない”という思いとみんなの歌声がひとりひとりの心に響いたことでしょう。